

Fate/GrandOrder
と大罪

蒼眼

碧羅蒼天

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

蒼眼の青年と正体不明の英霊。

これは、そんな二人の織り成す物語。

※2022 3/02:突然、更新が止まってしまい、申し訳ありませんでした。受験が終わった為、執筆を再開します。

また、こちらの諸事情により、執筆中だった作品を全削除し、新たに物語を書き始めます。

事情も話さず更新が遅れた上、今までの作品を楽しみにしていた方々には大変ご迷惑

をおかけします。

引き続き、F a t e / G r a n d O r d e r 蒼眼と大罪をお楽しみください。

目次

第零章：特異点F	炎上汚染都市	冬木
Prologue：来館	——	1
第一話：魔術とは何ぞや。	——	23

第零章：特異点F 炎上汚染都市 冬木

Prologue : 来館

歴史上の出来事というのは大体が他愛もない事がきつかけだったりする。

—— 例えは、

誰かの教えが世界を救う事がある。

誰かの支配が世界を創る事がある。

誰かの冒険に世界が驚く事がある。

誰かの閃きが世界を変える事がある。

誰かの献身が世界に広がる事がある。

誰かの忠義が世界を動かす事がある。

誰かの暮らしが現代に繋がる事がある。

そして、誰かの思想りそつが世界を殺す事がある。

「坊主、泊まり込みでバイトしねえか？」

「…はい？」

冬木市某所「駅前の献血イベントに気まぐれで参加していた少年、藤村蒼井ふじむらあおいはいきなりバイトにスカウトされていた。

なんでも、海外の研究機関である実験プロジェクトがあり、蒼井は血液にそのプロジェクトの適正があったとの事。

「んで、これがバイト代。」

「ん？…おお。」

バイト代も身振りがよく、学生である蒼井には魅力的な話だ。

しかし…

(…なんか、きな臭いな。)

結局、この日は親に話を聞いてから、という事で男の名刺を貰って帰った。

『『ハリリー・茜沢・アンダーソン』か…クォーターなのかあの人。』

その日の夜、自室で男から貰った名刺を眺めていると、ドアの向こうから母親が自分を呼ぶ声が聞こえた。夕食ができたようだ。

とりあえず、母には相談しておくべきだな。そう考えた蒼井は名刺をズボンのポケット

トに入れ、母親が待つリビングへ足を運んだ。…今日の夕食は鯖の味噌煮のようだ。

…結論から言うと、バイトに行く許可が下りた。

あの後、母親に名刺を見せながら昼間の話をすると、

「あら、いいじゃない。いい経験になるわ。行つてきなさい。」

と、母はまさかのオールオッケイ。さらに名刺に書かれた電話番号からあのハリーという男に連絡をとり、本人を置いてあれよあれよと話が進み出発の日となった。

「…まじか。」

あまりに事が早く進みすぎて出発の飛行機が出る空港で蒼井はそうポツリと呟く。

「坊主、もう飛行機来るぞ。」

ゲートの方でハリーが自分を呼んでいた。蒼井はもうこの際だし、この状況を楽しむ事を決め、思考をシフトしつつ声のする方へと歩いて行つた。

飛行機内の座席は空っぽだった。自分達が早く着いたのか、それともただこの飛行機に乗る人が少ないのか…そのどちらかは分からないが、ほとんど貸し切り状態である事には変わりなかった。

指定された座席に座り、背もたれに体を預け、大きくゆつくりと息を吐く。空港に来る前も結構な長旅だった為、ようやく一息つけると蒼井がリラククスしたその時。

「坊主、喉乾いてねえか？」

そう言つて、ハリーはコップに入ったお茶を差し出して来た。

確かに喉は乾いている、ありがたく頂く。と言つて蒼井はハリーからコップを受け取り、コップのお茶を飲みほした。

ハリー・茜沢・アンダーソンは冷や汗を拭いながら背もたれに体を預けていた。

その隣には睡眠薬を飲んだ蒼井が眠っている。周囲の座席には人がいない。

それもそうだ、この飛行機はこの青年を乗せ、ある場所へ運ぶ中継機でしかないのだから。

ハリー・茜沢・アンダーソン、彼はある組織から無茶なスカウト任務を受けた一人の研究員である。

ほとんど理不尽な状況の中、適合者であるこの青年を見つけたのはハリーにとつてかなりの幸運だった。

あとは向こうの連中に任せるだけ：そう考えた後、ハリーはこの後入るであろう臨時ポータスの使いどころを画策する。

(つつても、外車を買うつて決めてんだけどな。)

そう考えた所でハリーは再び、隣で眠る青年を一瞥した後、アイマスクを取り出すと、飛行機が動き出したのを体で感じながら自身も一時の眠りについた。

「……………」

次に蒼井が目覚めた時に見たのは、見知らぬ天井だった。

「何処だ此処…。」

体のだるさからかなり長い時間眠っていたことが分かる。

どうやら、どこかの建物の廊下の床に倒れているらしい…それだけを理解すると蒼井は首を曲げ、出来る限りの範囲で周囲の様子を観察し始めた。

左に曲げると白い壁。右に曲げると窓が見えた。しかし、外は吹雪いており此処がどこなのかは分からない。

ふと、自分の腕を掲げると、服の袖が空港で着ていたものとは違うものになっている。

「何時着替えたのか…は、今気にする事じゃないな。」

そして、さあ起き上がるか。と体を起こしかけたその時…

「あの…、どうして廊下に倒れているのでしょうか…？」

「フオウウウウ…。」

自分の足元から声が聞こえた。

ハリーのものではない。透き通った少女の声と犬か猫か分からないナニカの声。

「いえ、起きたら寝転がっていたもので。」

「はあ…。」

「フオウ、フオーウ！」

そう返しながら起き上がり、埃をはたきながら蒼井は声の主と向き合う。

そこに立っていたのは薄い紫色のような色の髪をした、蒼井と同じ年くらいの少女だった。その肩には犬か猫か分からないナニカが電気ネズミがごとく乗っている。

「いきなりですまないが、ここは何処なのだろうか？」

「はい、此処は『人理継続保証機関 フィニス・カルデア』です。此処がどんな場所にあるか、という意味なら雪山の奥としか私にも…。」

「フオウフオウフオウフオウ。」

少女の話を聞いて、どうやら目的地らしき所には着いていた事を理解する。

「…まあ、わかつてはいたが日本ではないか…。」

「…二ホン？と、いう事は先輩は此処、カルデアにやって来た最後の『適合者』なのですか？」

「…まあ、そうなるな。…ん？先輩？」

「それでしたら、あと数分でファーストミーティングが始まります。会場の管制室に案内するのでついてきてください。」

現状、此処は何処で、何をやる場で、自分はどうすればいいのか。それらが一切分からなかった蒼井にソレは願ったり叶ったりだ。

「わかった。…それで、なぜ俺を先輩と?…それにその生き物は?」

「フォウさんはフォウさんです。」

「フォウ?」

「あ、はい。」

ちなみに先輩呼びの理由は教えてもらえなかった。

管制室までの道すがら、蒼井と少女は少しだけ話をした。

彼女の名前はマシユ・キリエライト。此処カルデアの職員であり、これから説明会が行われるファーストミッションでは最前線に出るメンバーの一人だった。

ファーストミッションの内容や自分のような“適合者”がカルデアに集められた理由はこれからのミーティングで説明される、との事。

一緒にいたあの謎生物の名前はフォウ。カルデア内でもマシユしかその存在を知らず、マシユ以外に姿をみせたのは蒼井が初めてだという。

「フォウ、フォウフォウフォウ。」

「む、何だフオウ君。」

「…どうやら、フオウさんは先輩をライバルと認識したそうです。」

「あ？」

…何故か、ライバル認定されてしまったが　まあ、ある種の友好の印だろう…。たぶん。

「…つかれた。」

あの後、ミーティングに参加したが結論、なんの情報も得られなかった。

話が聞けなかった。という訳ではないのだが、如何せん専門用語らしき単語が多すぎて話の内容が一つも理解出来なかったのだ。

それよか、自分の隣で居眠りをしてビンタされ負い出された赤毛の少女の方が記憶に残っている。何しに来たんだあの娘。

マシユはファーストミツシヨンの準備があるとどこかへ行ってしまった。

そこでふと、蒼井は一つの事を思い出す。

「あ、荷物。」

そう、空港で持っていた自分の荷物である。青色のキャリーバックに入れて持ってきた筈だが、廊下で目覚めた時には近くには無かった。誰かが持っているのだろうか…。

「フオウフオウ。」

「…ん？」

…と、自分の足元でフオウ君がとてとてとこちらへ歩いてきた。

蒼井はフオウ君の体を持って抱きかかえると、

「なあ、フオウ君。青色のキャリーバック知らないか？」

と、聞いた。もう一度言う。フオウ君に荷物の所在を聞いた。

…流石に冗談のつもりだった。この動物が人の言葉を理解できるとは考えていなかったし、ほんの少しの気休めのつもりだった。

しかし、

「フオウフオウフオーウ!!」

「え、まじか。」

フオウ君は蒼井の言葉を聞くや否や、体をジタバタさせて蒼井の手から抜け出し、そのまま管制室の外へ出ていった。

蒼井はそれを見失うまいと急いで後を追いかける。

一応、どれだけ進んで、どこで曲がったのかを記憶しながらフオウ君についていくと、青色のキャリーバックが一つの部屋の前に無造作に置かれているのを見た。どうやら、キャリーバックを前においているあの部屋が蒼井の自室らしい。

…しかし、その前には先ほどビンタを喰らったあの赤毛の少女がいた。

「ん？このキャリーバック、君の？っていうことはここ君の部屋？」

「…そうだし、そうなるな。」

「フオウ。」

「なんだかグイグイ来るな…。そう思いながら蒼井はキャリーバックを持ち部屋に入ろうとする。

「あ、君もしかしなくても日本人だよな？髪の色で誤解されるんだけど私もなんだ！私、藤丸立香！^{ふじまるりつか}リツカでもなんでも好きに呼んで！ねえ、君はなんて名前なの？あ！その足元にいる動物なんていうの？可愛いね！犬でも猫でもないっばいし、何の動物なの？まあ、可愛いからいいか！そうだ、君はどうやって此処に来たの？私は駅前のチラシからバイトの申し込み見てきたんだけどさあ、長旅に時差ボケでつい居眠りしちゃったらビンタされて追い出されちゃったよ。あ、そうだ良ければ歯磨き粉貸して？いやあ、前日にちゃんと何回も準備した筈なのに何故か忘れちゃってさあくいや、異性に借りるのはどうかと思うけど、歯磨き粉なら問題ないでしょ！あ、そういえば名前なんていう

んだっけ？あれ、君の瞳青いね！すつごく綺麗！碧眼つてヤツなのかな？いやあく私も目の色珍しいってよく言われるけど琥珀色だからなく。なんだかさあ、碧眼つて美形のイメージない？あれ、私だけ？ああ、そうそう。君名前なんていうんだっけ？」
コイツヤバい。

蒼井は心の中でリツカを「ある意味危険人物」に認定した。

「はあくい、はいつてまゝ…つてうええええええ！誰だい君達!」

——部屋の中にはケーキに舌鼓を打つ白衣の男がゐた。

(あれ、ここ俺の部屋じゃないのか?)

少年は戦慄した。このままでは、何かと理由をつけ、ある意味危険人物を退ける事が出来ないからである。

「フオウフオウ、フオウ。」

足元の謎生物が心中を覗き見たように鳴いている。

許してあげてほしい。だって明らかに距離の詰め方がおかしいのだ、彼女。

「すいませ〜ん。この部屋つて彼の部屋じゃ…つてそろそろ君、名前教えてよ。」

そして、部屋番の主を差し置いて勝手に話を進める藤丸。しかも名前を教えない蒼井が悪いみたいな雰囲気醸し出してる。

「ええっと、た、大変だね…?」

「いえ、大丈夫です。名乗らなかつた俺も悪いので。」

しかも目の前の白衣の男に同情を喰らう始末。彼が何をしたのか。

「はあ…俺の名前は藤村蒼井。アオとでも呼んでくれれば。」

「へえ、女の子みたいだな名前だね。」

「しばくぞ。」

「あはははは…。」

「フオウ…。」

蒼井と立香の漫才のようなやり取りに苦笑いするしかない白衣の男。しかし、そこはしっかりと切り替えて朗らかな笑みで二人に向き合った。

「じゃあ、ボクも名乗らないとだ。ボクの名前はロマニ・アーキマン。ドクターでも、ロマンでも、好きな方で呼んでくれ。」

「あ、私は藤丸立香。よろしくドク。」

「君、距離詰めすぎじゃないかい!？」

(まあそう思うよな。)

「フオウ。」

どうやら、藤丸立香の距離の詰め方は大人の目から見ても異質らしい。そのことを確

認したその時、

『ロマニ、今医務室かい？』

部屋の中の誰でもない声が響いた。

ロマンは白衣のポケットをまさぐり、通信端末と思われるものを取り出す。

因みにここは医務室ではない。

「やあ、レフ教授。何かあったのかい？」

『ああ、実はBチームのメンバーが一人と補欠の子が一人管制室にいないんだ。補欠はともかく、Bチームの子を見ていないかロマニ？』

通信の向こうの男：レフが言う補欠とは蒼井の事だろう。

「いや、Bチームの子は見ていないな。補欠の子は今一緒にいるけれどどうする？」

『いや、補欠はいい。それより管制室に来てくれないか。Bチームの数名のバイタルが安定しない。医務室から管制室まで二分とかからないはずだ、頼むよ。』

…通信が切れる。もう一度言うがここは医務室ではない。

「…どうしよう。ここから管制室まで走っても五分はかかるぞ…。」

「いや、ドクが悪いでしょ。…っていうか、ドクってこの職員さんなんだよね？」

「あ、ああ。一応、この医療部門のトップを任されてるよ。」

「尚更サボっちゃダメじゃん!!」

立香の叱責がロマンに飛ぶ。とそこにひい、と情けなく怯むロマン。
その次の瞬間、部屋の電気が消えた。

「!?」

「うわああ!? な、何!?!」

遅れて轟音と振動が響き渡る。

「な、なんだ!?!」

「爆発!?!」

「わわあ、うわあああああ!!!」

「フオオオオウ!?!」

突然の停電、そして爆発。立て続けのトラブルに部屋の三人と一匹はパニックになる。

「うわああああ!!ば、爆発!なんか爆発したああ!!!」

「爆心源は!?!」

「方角からして管制室だ!!モニター!!」

混乱の中、どうにか冷静に対処しようとする蒼井とロマン。立香はすっかり混乱しきっている。

そして、モニターが映し出したのは…

「な…!?!」

「…これは。」

炎に包まれた管制室。まさに地獄のような光景だった。

モニターで見える限り、生存者の姿は見えず生命の灯は一つも感じられない。

と、そこで部屋に電気がつく。予備電源に切り替わったようだ。

「…アオ君、君は立香ちゃんを連れて外へ。彼女の事を頼んだよ。」

「…ドクターは。管制室へ？」

「ああ、…生存者を探しに行くよ。」

ロマンの目は強い覚悟で満ち溢れていた。

「分かりました。気を付けて。」

そして、ロマンが管制室の方へ走って行った後、蒼井は未だパニック状態の立香の手首を引き、ロマンと逆方向に走りだそうとする。

「フオウフオウ!!」

「…フオウ君？」

その時、フオウ君が突然大きな声で鳴き始める。

「…あ。」

その時、蒼井は一人の人物を思い出した。目覚めた時に出会ったあの少女…。そう、マシユが、まだ管制室にいる筈なのだ。

「……まあ、迷う暇も必要も無いな。」

「…フオウ！」

蒼井はそう決心をすると手首を握っている立香に向かい合う。

「藤丸。」

「あ、ああうん。ようやく落ち着いた。…それで？出口はどっちだっけ？」

「俺、管制室に用事があるんだ。」

「え、ちよつと待って。」

「お前は管制室の反対方向にひたすらに逃げてくれ。たぶん出られるだろうから。」

「待って、適当すぎるから。まって。」

「じゃあ、時間無いから。健闘を祈る!!」

「え、待って、ちよつおい…ふつぎけんなあああ!!」

そういつて蒼井は立香を置いて全速力で管制室の方へと走って行った。その前をフオウ君が案内するように走っている。

「傍から見ると最低だよ、君フオウフオウ、フオウ。」

「うーん、君の言葉は分からない筈なのに何を言っているかはわかる気がする。」

前を走るフオウ君にジト目で見られながら管制室への廊下を走る蒼井。謎生物の視線が痛い。

まあ確かにぱつと見最低な事をしてるし、弁明も何もないのだが。

「ちよつ…アオ！あおiiiiiiii!!!」

「ゑ。」

「フオオオオウ?!?!」

しかし、先ほど置き去りにされた立香は後ろから走って追いかけて来た。

まるで人間列車のごとく蒼井の元へ追い付き、そのまま並走する。

「な…、なんでお前逃げなかつたんだ!?!」

「あの状況でほっぽり出されて逃げられるとでも!?!」

正論である。

「あと、ひとりこゝわゝいゝがらゝいゝっじよにゝいゝで!!」

本心である。

「ええ…だからって自ら危険に入り込む事ないだろ…。」

「ブーメランって知ってる?」

「フオウ。」

「え、なんで君達ここにいるの!?!」

と、前方からロマンの声が聞こえる。どうやらいつの間にか追い付いていたらしい。「ちよつと人探しに！」

「フオーウ!!」

「え、そうなの!?!相談してよ!?!」

緊急事態の最中の筈なのに思いきりマイペースな二人、その様子を見て呆れた表情を浮かべるロマンだが、すぐさまその表情を硬くし、

「…危ないと感じたらすぐ逃げる事。数分後に隔壁が閉じるから、それまでに脱出する事。以上の事は絶対に守ってくれ。」

そう、二人に向かって言った。

「分かりました。」

そう二人が同時に返したその時、管制室が見えてきた。

「ボクは地下に向かう!二人とも、隔壁が閉じる前にちゃんと脱出するんだよ!!」

「了解です…って、蒼井!?!」

蒼井は部屋の中に入った瞬間、急な不安感に襲われた。嫌な予感がする。根拠のないその感情は、自然と彼の足を早まらせる。

完全無策で炎が立ち込めるその部屋に入るその姿は勇敢というよりも愚かしいという言葉の方が相応しい程だった。

管制室の中、想像を超える熱量に耐えながら蒼井は彼女の…マシユの姿を探す。そして

「…あ。」

少年は、それを見た。

瓦礫に潰された少女の下半身を見た。

血に濡れた、少女の顔を見た。

「…せ、ん…ばい…？」

全身を血で濡らした少女が少年先輩を呼ぶ。

死にかけの虚ろな瞳が自身の姿を映す。

…怖い。

少年の心中はその言葉一色であった。

そこには明確な“死”があった。

生き残った自分さえも飲み込みかねない死があった。

彼女少女はもう助からない、お前少年にできる事は何も無い。

そう、突き放されるような錯覚を覚えた。

「……………」

少年の体は『死にたくない』とこわばっている。

少年の理性は『逃げろ』と告げている。

「にげ…て、くだ、さい。わた…し、はもう…助かりません…から。」

「大丈夫だ、マシユ…最期まで傍にいる。」

…しかし愚者^{少年}の心は『逃げたくない』と叫んでいた。

そして少年は地面に置かれた少女の手を取った。

力強く、しかし優しく、離さないといわんばかりに。

理由は分からない。動機もはっきりしない。

しかし、ここで逃げては駄目だという確信だけが少年を動かしていた。

『システム、レイシフト最終段階へ移行。座標、西暦2004年1月30日、日本、冬木市。』

「蒼井の意識の外、管制室全体でそんなアナウンスが聞こえた。」

『アンサモンプログラム、セット。マスター候補生は最終調整へ。』

無機的なイントネーションで何かのシステムが作動していく。

『カルデアスの状態変化。近未来観測データ、更新。』

『近未来百年以内の地球における、人類の痕跡が消失。』

『人類の生存確認、失敗。人類の未来保証、失敗。』

淡々とした口調で、絶望的な状況が告げられていく。

『管制室ゲート封鎖、館内浄化まであと180秒。』

奥の方で何かが閉まる音が聞こえ、完全に逃げ場が無くなった。

「ああおおお!!! どうじよ お お お お !! がくべきどじじやつだああああ!!!」

そして、立香の涙混じりの声が管制室内に響いた時。

『レイシフト実行マスターを検索…。発見。』

『マスター番号 47番 藤丸立香^{ふじまるりつか}。』

『マスター番号 48番 藤村蒼井^{ふじむらあおい}。』

『以上、2名をマスターとして登録。レイシフトを実行。』

『全行程、完了^{クリア}。ファーストオーダー、実証開始。』

立て続けにアナウンスが流れ、そして――

視界が、白く塗りつぶされた。

第一話：魔術とは何ぞや。

…目覚めた時、蒼井が目にしたのは曇天の空だった。

「…もはや、天井すらないのか。」

体を起こしながら、蒼井は周囲を確認する。

瓦礫にあふれた大地。そこら中、炎で包まれた景色。

崩落したビルがあちらこちらに見られ、生命を一切感じられない。

そして、何よりも此処は管制室ではない。

「……待て待て、どんな魔法だ。」

どういう訳か、蒼井はどこか別の場所へ飛ばされてしまったらしい。

ふと、自分の右手を見てみると鎖のような細いS字状の赤い文様が刻まれている。

何時、タトウーなんて掘った…？そんな疑問が浮かぶが、今気にする事ではないだろう。

兎に角、状況を整理する。

大規模なテロがあったのか、それとも何かの災害に巻き込まれたのか…。

その詳細は分からないが、カルデアの管制室近辺が爆破。

蒼井が視認した限り生存者はゼロ。

(いや、マシユは意識を保っていたし、あの場合生存者になるのか…?)

「…！ そうだ、マシユ!!」

そこまで思考を巡らせた所で蒼井は一つの可能性に気づく。

あの場にいたマシユも此処に転送されたのなら、瓦礫から抜け出したかもしない。それなら、まだ助けられるかもしれない。

「よし…!!」

可能性としては限りなく低いだろうが、諦めるよりずっといい。

蒼井はすぐさまマシユを探す為、走り出した。

「……。」

そして、初っ端から動く骸骨に出くわす蒼井。

「わあ、リアルホ●ーマン。」

精神的に余裕はあるらしかった。

一方、その頃。

「オ・ル・ガ・マ・リーよ!! って、貴女、補欠の!? 何でこんなところにいるの!?!」
そう、彼女の名はオルガマリー・アニメスフィア。

カルデアの所長にして、立香をピンタして管制室に追い出した張本人である。

「今はそんな事いいですから!! ……口閉じててください! 舌噛みますよ!!」
「え、ちよつ…きやああああ!!」

そう言うや否や、立香はオルガマリーの体を抱え再び走り始める。

先ほどよりも加速し、みるみるうちに骸骨達との距離が離れていく。

しかし、

「…!!」

前方に一体の骸骨を視認した立香は足に力を入れ、急ブレーキ。

しかし、それが悪手となった。

「…やばい。」

「ひいつ!!」

急ブレーキの音に気づき、骸骨がこちらを視認。

しかも、後ろから集団の骸骨達が追い付いてくる。

横に逃げようにも前の骸骨の装備は弓。迂闊に動けば狙撃されるだろう。

「……!」

骸骨達が用いる剣は瞬く間に折られ、槍はその盾を貫くことも、あわや振るう事すら敵わない。

反撃の機会も与えられることなく、あつという間に骸骨達は全滅した。

「…戦闘終了。何とかなりましたね、マスター。」

「ああお疲れ様、マシユ。…さて、藤丸。無事か?」

「あ、うん…。なんとか大丈夫。どこも怪我してない…。じゃなくて。」

骸骨達を退けた後、いつもと同じペースで話そうとする蒼井に待ったをかける立香。

それもそのはず。爆発現場に居合わせ、気付いたら見知らぬ土地に飛ばされ、怪物に襲われ、極めつけに超人じみた力の少女と共に現れた知人…。文字におこしても情報量が多すぎる。

「ちよつと待ちなさい!今、マシユが貴方をマスター…って」

「…オルガマリー所長。ソレを含めて、今から説明します。先輩、指定されたポイントに到着しました。サークルを設置します。」

「…わかった。状況説明は…すこし待ってください。」

短髪の少女…マシユが持っていた盾を地面に置くと、周囲の景色が一変する。

まず、炎と瓦礫だらけの風景が消え、周囲は全くの暗闇に包まれる。

さらに、いくつもの明るい青色の線がまるで電子回路のような形状で水平上に浮かび

上がった。

『『こちら、カルデア管制室。通信状況は良好。うまく設置できたみたいだね。』』

そして、マシユのもつ端末からロマンの声が発せられた。

「ちよつと、ロマン!?!何で貴方がその椅子所長席に座っているの!?!」

『『うええ!?!しよ、所長!?!あの状況で生きてる!?!どんな生命力!?!』』

「はったおすわよ!?!それに、それだけじゃないわ!?!何故、彼がマスターになつてい
るの!? 彼、魔術回路からして一般人の筈よね!?!」

「そう言つて、オルガマリーは蒼井を指さす。さされた蒼井本人は若干困つた顔をして
いる。」

「アオ、とりあえずそつちで…ていうか、カルデアでなにがあつたの?」

「あ、ああ。まずはそこからだな。…ドクター。」

『『…うん、わかつた。』』

そこで立香は助け船を出すように口をはさんだ。

立香の言葉を聞いてオルガマリーも冷静になつたらしく、おとなしくロマンの言葉に
耳を傾ける。

『『まずは現状。』』

『『カルデア管制室が何者かの手によつて爆破、被害は甚大。』』

「『カルデアにいる生存者は約二十名程度。』

「『現状、ボクより上の階級の職員がいないため臨時で指揮をとっています。』」

ロマンの報告を聞いたオルガマリーは、先ほどと打って変わって真つ青な顔をしていった。

「…まって、じゃあ…マスターは？レフは、レフはどうなったの!？」

「『…残りのマスター四十五名。全員、危篤状態。レフ教授については搜索中ですが…。』」

「『!!!今すぐコフィンの冷凍保存機能を使いなさい!!一人も死なせないで!!』」

「『…え、は、はい!?!』」

顔を絶望に染めつつも、オルガマリーは適格な指示を出す。

ロマンがコフィンへ大急ぎで向かったためか一時的に通信が切れる。

本人の許可なしの冷凍保存…。おそらく犯罪行為ではあるが、現状最善の選択ではあるのだろう。

「…それで、貴方が何故マスターに?」

「ええつと…俺にもさっぱり。いつの間にかこうなつてた…としか。」

「はい、先輩には私から一方的に契約したんです。先輩に落ち度はありません。」

「……。」

そして今度は蒼井の方へ詰め寄った。そこにマシユも加わり、立香は段々とおいて行かれる。

「…そう。なら今回、特例として藤村蒼井、貴方のマシユ・キリエライトとの契約を認めるわ。」

「分かりました。」

「…それで、オルガマリー所長。これからどうするんですか…？」

「……あのお。」

オルガマリーや蒼井達が話を進めている横で、立香はおずおずと手を挙げ、言った。

「まず、マスターって…何？」

「あ」

「はい？」

立香以外の全員が、声をあげた。

…そして、乾いた音が辺りに響く。

マスターについて語るにはまず、サーヴァントについて語らねばなるまい。

“サーヴァント”。魔術世界における最上級の使い魔。その正体は歴史上に実在したあらゆる時代の英雄達、正確にはその影法師。それらと契約を交わし、使役する人間……否、魔術師こそがマスター。

そして、蒼井はデミ・サーヴァントと呼ばれるサーヴァントと人間の融合体、マシユ・キリエライトと知らずの内に契約してしまつたらしい。

「なる、ほど……？つまりそのさーう。あんと？と契約した人がマスターって訳ね。」

「貴女、正座させられてその態度ってどういう神経してるのよ!？」

「私にまたビンタしといてよく言いますね、パワハラですよ普通に!？」

そして、目の前では自分の同期が上司にビンタされ、正座させられている。

そんな光景^{カオス}を目にし、蒼井は一人これからの道のりが予想以上に前途多難である事を悟つた。